

## 中世の西洋における子ども観の研究

岩 崎 浩 三・兎 沢 聖

### The Concept of Childhood in Western Medieval Society

Kozo IWASAKI and Akira TOZAWA

This paper explores the studies of children and childhood in the western society in the Middle Ages. Since the publication of "Centurirs of childhood" in which Aries asserted that the concept of childhood had not been recognized in the western medieval society, many writers have supported the idea. Recent findings of medievalists' researches, however, show different results from Aries's. Pollock, Schultz and Shahar argue that the concept of childhood existed in the medieval centuries. This paper states how these researchers believe of the childhood, image of children and how children were treated at that time.

#### 1. はじめに

過去11年間に、わが国の児童虐待は約25倍に増加した。平成7年に「児童の権利条約」を批准し、平成12年には「児童虐待防止法」が成立し、児童の権利を擁護する意識が国民の中に定着しつつある。しかし、子どもの権利の概念や児童福祉の理念は昔からあったものではない。「子ども」を「子ども」として認識することが中世にはなかったといわれている。

中世には、ローマ教皇や十字軍、王族の歴史の文献はあるが、1950年代までは、個人の伝記等を除き、過去の年代の家族や児童全般についての文献は殆どなかった。1960年にアリエス(1980)が「中世の社会では、子供期という概念は存在していなかった」(p.122)というショッキングな発表をして以来、多くの歴史学者が児童期の歴史に関する多くの論文を発表している。しかし、過去において児童期をどうとらえてきたか、また児童をどのように理解したか、さらに児童をどのように扱ってきたかについて、様々な意見がある。学説としては大きく分けて二つの流れがあり、一つはアリエスの児童期がなかったとする学派、もう一つは児

童期はあったとする学派がある。それらの学説を最初に紹介し、実態がどうであったかを考察する。

#### 2. 児童期について

アリエスは、その著「〈子供〉の誕生」の第1章「人生の諸時期」において、中世のテキストから中世においても、人生には7歳までの幼児期、14歳までの子供期、21歳までの青春期、45歳までの青年期、鈍重期、老年期、老衰期と7つの人生の諸時期があることを認識しており(p.23-24)、あるいは、「子供(enfance)と小児(puérilité)、若者(jeunesse)と青春期の少年(adolescence)、老人(vieillesse)と老衰(sénilité)など、これらの言葉はそれぞれ人生における異なる時期を意味しているのである。」(p.21)と述べているが、「こうした説明が実際には空虚で言葉の上だけのもの」(p.24)であり、中世社会には児童期の概念がなかったと主張した。しかし、「このことは、子供たちが、無視され、見捨てられ、もしくは軽蔑されていたことを意味するのではない。子供期という観念は、子供に対する愛情と混同されてはならない。そ

れは子供に固有な性格、すなわち本質的に子供を大人ばかりか少年からも区別するあの特殊性が意識されたことと符合する」(p.122)と述べている。彼は、中世という時代の社会において、児童期が人生の中で重要視されていなかったと主張している。

その根拠として、アリエスが第一に挙げたのは、中世の絵画である。「ほぼ17世紀までの中世芸術では、子供は認められていず、子供を描くことが試みられたこともなかった。だが中世芸術における子供の不在は器用さが欠けたため、あるいは力量不足のゆえであるとは考えられていない。それよりはむしろ、この世界のなかに子供期にとっての場所があたえられていなかったと考えるべきであろう」(p.35)と述べ、彼は中世の絵画について、子どもらしい身体の描写がなく、大きさが大人と違っていただけであることから児童期の観念がなかったと論述する。

例えば、11世紀の細密画に、画題は「幼な子たち」となっているが、描かれているのはイエスの周囲にいる8人の大人であって、「子供期の特徴をなんら有してはいない。描かれた8人の人物の背丈のみが唯一、かれらを大人と区別させるにすぎない」(p.35)とし、また、「11世紀のフランスの細密画には聖ニコラか蘇らせた3人の子供が、やはり大人より小さな背丈で描かれているが、他の表現や特徴では大人となんら変わるところがない」(p.35)と主張する。

しかし、フラー (Fuller, 1979) も、西洋における子どもの描写方法を研究して、中世には児童期がなかったというアリエスの説に反対している。多くの美術作品で子どもが写実的に描かれていることを示し、子どもが「小型の大人」として描かれたのは「政略結婚の取引要因」、すなわち、その身分に相応しい宝石や服装を身につけたためであり、その他の目的のためには、親の希望に添って描かれた (p.78) と論じている。いずれにしても、絵画の問題は芸術的慣習問題としても社会的現実問題としても問題が多くある。

次に、アリエスは児童期がなかったとする理由として6つ挙げている。①「13世紀まで幼児の聖母を除いて、子供期に固有の性質にたいし示される顕著な無関心さは、たんに芸術上の形象にのみ見られるのではない。習俗という現実のなかでも、当時子供期がほとんど特に区別されていなかったことを、服装もまた証言している」(p.50)と述べ、16世紀あるいは17世紀まで幼児以上の子どものための特別の服はなかったこと、

②「7歳前にはどちらかといえば人形とドイツ玩具で遊ぶことが多かったが、7歳以後はむしろ狩猟、馬術、武術、それに芝居である…当時は今日見られるような子供用の遊びと大人が行う遊びの間に厳密な区別は存在していなかった」(p.65)のために、恐らく17世紀まで、子どもは幼児期以降大人と同じゲームで遊んだこと、③「現代のモラルの、最大の厳格さと畏敬の払われている不文律の一つに、大人が子供を前にして性に関係したあらゆるほのめかし、ことに猥談を口にするのを強くいましめることがある。この感覚はまさしく旧社会のあずかりしらぬものであった」(p.96)ことを例証し、16世紀まで子どもは日常的に好色性にさらされたこと、④「長い期間にわたって学校は年齢を区分し年齢によって生徒をふり分けることには無関心だった…中世の学校はなんら子供を保護するなどという配慮はなしに、子供、青年、大人など、早すぎるとか遅すぎるとすることなく同じように、教壇の下へ集めてきた」(p.310)と17世紀あるいは18世紀までは学校教育を受けていた子どもの年齢に関して明らかではなかったこと、⑤15世紀に至るまで家族の絵が入った記録が無かったことは、「人びとは家族にたいして十分な価値を認識していなかった」(p.340)こと、そして、⑥「中世には、子供たちの教育は大人たちのもとの見習修行によって確保され、子供たちが7歳から他人の家族のなかで暮らして」(p.346)いて、15世紀になっても、子どもは7歳あるいは9歳には家庭を追い出されていたこと、上記の①から⑥までを中世には児童期が無かったとする理由として挙げている。

アリエスのこれらの主張に対して賛否様々な反応があった。

デモス (Demos, 1970) は1630年代にマサチューセッツ州のプリマスに築かれた清教徒の植民地について研究し、子どもの実体験を再現して、例えば家屋の大きさ、家具、衣服の種類や遺書、植民地の財産目録や公文書等の書類から、プリマス植民地が存在した期間には児童期の概念はなかったという結論に達した。17世紀には児童期の概念は生まれていたというアリエスの主張に対して、彼は、17世紀でさえ児童期の概念は存在しかなかったと主張している。その根拠として、17世紀の子どもが大人と同じような衣服を着ていたことを取り上げている。彼は、7歳以下の子どもは大人とは異なる服装をしていたので幼年期の認識はいくらか存在していたかもしれないと考えたが、最終的には「子

どもが大人とは異なる特別な集団であり、子ども特有のニーズや興味や能力をもっているという考えはほとんどなかった。むしろ、子どもは小さな大人であるという見方が大勢であった。つまり、男の子は小さな父親であり、女の子は小さな母親であった」(p.57-58)と結論付けている。

ショーター(1987)は、子どもに対する態度の変化に注目した。彼は、「母親が幼児の養育に心を砕くようになったのは、近代になってからのこと」(p.176)であって、それまでは、子どもは人間と見なされないほど社会的地位が低く、「母親は、幼児といえども自分と同じように喜びや痛みを感じることでできる人間だとはほとんど(「まったく」という人もいる)思っていなかった。」(p.177)と述べ、児童期の認識がなかったという見解を示した。

ホイルズ(Hoyles, 1979)も、過去には児童期の概念はなかったとし、「児童期は一つの社会的因習であり、自然の態様だけではなく」(p.2)、「児童期も現在の核家族も比較的最近の社会的発明である」(p.16)という。

イリイチ(Illich, 1973)も、アリエスの理論をそのまま受入れ、「乳児期、思春期、青年期と区別する児童期は、歴史上ほとんど知られていなかった。キリスト教の世紀には、体型にさえ目もくれなかった。芸術家は小型の大人として描き…現代の世紀以前には金持ちも貧乏人も子どもの服、子どものゲーム、法律からの免責を知らなかった」(p.26)と児童期を否定している。

アリエスの書物が英語に翻訳出版されてから、多くの研究者が中世の児童期に関する研究を行ったが、最近ではアリエスの説に反対する研究結果が多く、現在ではアリエスの学説は中世史の学者間では「人間の発達過程の明確な期間としての児童期が現代以前にはなかったということを真面目に受け止めている者はいない」(Nicholas, 1991. p.31)といわれる。

ニコラス(Nicholas, 1985)は14世紀ベルギーのアントワープ市の家庭生活を研究して、「14世紀のアントワープ市の事例は、中世の認識に児童期が存在しなかったというフィリップ・アリエスの考えに明確な修正を加える」(p.109)として、その事例を発表した。

ラドゥリー(Ladurie, 1978)は、14世紀初頭のフランス南部の農村モンタルー調査から、この農村では、「金持ちでも母親が授乳するのが普通であり」(p.208)、

「子どもを愛するのは比較的最近からだという学者もいるが、愛情一杯であったことは疑う余地がなく、子どもの死だけでなく、病気や別れでさえも、親にとって深い悲しみのもとであった」(p.210)とし、2歳未満を乳児、12歳までを少年、13歳か14歳までを思春期青年といい、12歳になると父親の羊飼いの仕事をするか、徒弟に出された(p.215-6)という歴史事例を証拠として児童期の存在を訴えた。

ライマン(Lyman, 1976)は、AD200年から800年の調査をして、しばしば「子殺し、子捨て、中絶、子どもの売買は法律や宗教の権威者により禁止されたけれども、風習が根強くあまり効果がなかったよう」(p.95)であり、建前あるいは理想と現実には差があったが、8世紀までの親は自分の子どもに対して喜びを感じており、「親の愛は、自然であり好意的」(p.95)であると述べている。

マクローリン(McLaughlin, 1976)も9世紀から13世紀の調査で、親の子どもへの態度には拒否と養育の間で葛藤があったけれども、12世紀以降は子どもの発達段階に関心を持ち、愛情の必要性を認識して、乳児や幼児に対してははっきり優しさが見られた(p.117-8)と述べている。

シュルツ(Schultz, 1995)は1100年から1350年までの現存する中世高地ドイツ語で書かれた原本を活用し、この時期にドイツには児童期の概念が存在し、その概念は啓蒙運動以降の西洋の概念とは異なるものであることを主張した。

ポロック(Pollock, 1983)は、系統的な方法で過去の研究者の説を検証する準備をして、15世紀から20世紀初頭までの広範囲のイギリスとアメリカの日記と自叙伝的な資料を調べ、詳細に分類し分析した。その結果、16世紀の研究で、子どもは大人とは違い、その違いは一定の発達段階を通るもので、その中には遊びも、しつけも教育も、保護もあった(p.268)ことを例証している。

ラスレット(Laslett, 1971)の英国教区記録の広範囲な研究は、通常の人々にとって家族規模が中世以降劇的に減少してはいなかったことと、「核家族」に関して著しく現代的であるものは何もなく、と確認した。さらに、「中世ヨーロッパと現代ヨーロッパの間に、児童期の成立と家族の態度には大きな変化があったというアリエスの主張は、イギリス社会の記録からも実際に我々のデータのどれからも実証できない」

(p.260)と述べている。

カニングガム (Cunningham, 1995) も1500年から1900年までのヨーロッパと北米の歴史文献から児童期に関する概念の変化を調べ、多くの学者が主張しているように、子どもは未熟で不完全な大人であって、キリスト教の戒律と教育が子どもを立派にするように鞭でしごいたというのは誤りで、大多数の子どもは核家族の中で、親に愛されて育ったと述べている。

シャハー (Shahar, 1990) は、中世に関する多様な史料に基づいて、「児童期は、実際に人生のサイクルの中で明確な段階として受け止められ、児童期の概念があり、教育理論も規範も存在していた」(p.3)と述べている。

アリエスその他の、中世には児童期がなかったという説に対する反論には、当時の子どもをさす言葉の問題、例証している時代の問題、用いた事例がごく一部の貴族のみに適用できるもので一般化するには無理がある等の調査対象の問題、解釈の問題などにおける誤りの指摘がある (Pollock, 1983, Schultz, 1995, Shahar, 1990)。ウィルソン (Wilson, 1980) は、アリエスの主張はめちゃくちゃであり、証拠としてあげたものには誤りがあり、児童期が現代の発明であるという論文には、信頼できる証拠が殆ど無く、不注意にもそれとは反対の証拠を提供していると、辛辣にアリエスの学説を批判した。

### 3. 児童への理解について

「16世紀の上流階級の親子関係もかなり疎遠なものであった。乳幼児と子どもの死亡率が高かったことがこの理由のひとつであったが、このことは、そうした短命な生き物に対して多くの感情的資本を投資することを愚かしいものにしていった。その結果、16世紀と17世紀初めの非常に多くの父親たちは、今日の人々が家庭内で飼育している猫とか犬といったペットに与えるのとまったく同じ程度の愛情を持って、乳幼児期の自分の子どもたちを見ていたようである」(ストーン、1991、p.85)。このように親は子どもを一個の人間として扱わず、生存運が極めて少ない小さな生命体への愛着をもたないように情緒的な障壁を立てたと考える。「伝統社会では、母親は、2歳以下の幼児の成長や幸福には無関心であった」(ショーター、p.176)ことは、「子どもの死に対してまったく哀惜の情を示さないことにはっきりあらわれている」(ショーター、p.180)。

「高い乳幼児死亡率によって惹き起こされた心理的関わりへの強力な刺激がなかったことは別に、上流階級の大部分の両親、および多数の中産階級と下層階級の親たちは、相対的に言って、自分の子どもたちと顔を合わすことがほとんどなかったが、これは、子どもを『里子に出す』ことが広く行われていたためであった」(ストーン、p.86)。さらに、「新生児を、生後1年間あるいはそれ以上のあいだ、報酬目当ての乳母のもとに送り込むこのような制度が存在した理由のひとつは、こうすることが、乳幼児死亡率のぞっとするような水準を、いっそう耐え忍びやすいものにしていったからであった。雇いの乳母に育てられた乳幼児の死亡率は、母親の手で育てられた乳幼児のその約2倍であったらしいが、少なくとも両親が乳幼児と顔を合わせることがなかったこと、あるいはまた、彼らが乳幼児というものがどのようなものであるかを詳しく知らなかったことは明らかである」(ストーン、p.86-7)。つまり、母親は関心が無かったために子どもを乳母に出した。乳母は、十分なミルクを与えず、乳児はいつもひもじい思いをして泣くが、それに答えずネグレクトがあり、栄養不良と病気のために死亡したのである。ショーターは「母親が幼児の養育に心を砕くようになったのは、近代になってからのこと」(p.176)と言い、中世においては母親は子どもを愛さず、赤子に愛着を持たず、子の福祉には無関心であり、自分達と同じように喜びや痛みを感じる人間と考えなかったと主張する。母親は「幼児の身になって、幼児にこの世界がどう映っているかを想像し、できるだけ幼児にとって居ごこちのいい、楽しい世界を作ってやろう—われわれが「共感」という言葉で言いあらわしていることである—とは思わなかった」(ショーター、p.177)と述べる。「彼女たちが、本来の母性愛をもっていなかったとすれば、それは、生活条件や共同体への気くばりから、やむをえず、子どもの幸せよりも他の事柄、たとえば野良仕事や夫を手伝って機織りをするを優先しなければならなかったからであった」(ショーター、p.177)と彼は言う。

子どもへの理解に対して、ドゥモース (1990) は、「体罰を受ける子どもに共感反応をするという単純なことさえ、昔の大人にとってはむずかしかった。子どもを打つべきでない、と忠告した教育者は近代以前にはきわめてまれであったが、そういう人たちでさえ、子どもに痛い思いをさせる、ということよりも、悪い

結果をまねく、ということを根拠に批判的だったのである。しかし、共感という要素が当時は欠けていたために、その忠告は少しも効を奏さず、子どもはあいかわらず打たれつづけていた」(p.41)。また、「子どもに共感するために必要な心のメカニズムができていなかったからこそ、母親たちは、数百年にもわたって、幼児をスウォドリング・バンドで縛り上げ、幼児が泣いて抗議してもそれを平然と眺めていられたのである」(ドゥモース、p.42)。

中世では7歳を一区切りにして、成人への仲間入りをしたと考えられているが、ハント(Hunt, 1970)は、「近代の初期の文献からは、7歳という年齢を児童の人生での特別な転換期とし、公式の儀式は行わないがある種の『卒業』が起きているという感覚があった」(p.180)。だから、大人社会にたいしての新しい責任を自覚し、大人社会での従来と異なる関係をもつことになったことが伺えるが、7歳というのは大人と考えるには短すぎ、身体的な成熟には後数年を待たねばならないと主張している。

子どもを人格のある人間とみなさない思想に対して、マクローリン(McLaughlin, 1976)は、9世紀から11世紀にかけて、「子どもが親の所有物であると言う考えが支配的であったが、この概念につきものの危険性について広く認識されており、外部の権威による介入が進められていた」(p.140)が、所有物だとする考えと同時に、子どもであることの価値を認めた児童観を持ち、人生のなかの明確な一時期として児童期があり、その児童期の感覚で児童を見る考え方が入ってきていたと述べている。

それに対して、タッカー(Tucker, 1976)は、「15世紀から16世紀までの中世では、子どもが大切だという考えがなかった」(p.229)。児童は社会階層の最下位であり、「人間のニーズを持つ人間であるということに思い及ばなかった」(p.230)けれども、当時の民話から、子どもは純粹無垢であり、そのことは、子どもが死ぬと白い衣服を着せ、白い棺に入れ、葬儀参列者も白色の衣服を着ることで表わしていると記している。

乳幼児死亡率の高さ、社会経済的な環境による子どもへ無関心という主張に対して、シャハーは、「子どもは父母に授けられた神からの信託物であり、子どもを養育し教育する義務は父親と母親で分担すべきであると考えられた。子どもへの愛情と関心は人間にも動物にも共通の自然な本能から生じると考えられた」

(p.112)と述べ、親の人間としての本能は、昔も今も子どもを愛することに変わりはないと主張する。そして、医師や説教師などの指導者は母親による養育が良いと勧め、特に母親の母乳による授乳が子どもの身体発達にも良く、親子の情緒的結びつきを強めるので推奨したと述べている(p.55)。中世の絵画からは、母親が乳児を抱いたりおんぶしたりしていることがわかるし、農婦が背中の籠に乳児を入れて働いている姿が描かれており、子どもが大切にされていないとは考えられないとしている(p.97)。また、若い貴族は7歳か9歳まで母親と一緒に、それから騎士見習として働き、「12歳頃に本格的な騎士訓練が始まった」(p.210)のであって、中世では、子どもに期待されたものがこの年代に徐々に変化があったけれども、少年の場合には7歳から14歳、少女の場合には7歳から12歳が一つの段階と考えられたと、彼女は示唆している。

さらに、「16世紀と17世紀を通じて、イギリスの中産階級と上流階級の家族の構造に、その社会的な諸機能の点で、そしてその内側における情愛的な諸関係の点で、重大な一連の変化が生じた」(ストーン、p.172)が、フェミニストの視点から、男性優位社会において、夫のそして父親の権力の強化を図る家父長制を拡充するための手段として、母親に課したのが母の愛であって、母の愛は、社会的に作られた概念構成である(Stearns & Stearns, 1993, p.818)と母性本能を否定する者もいる。

シャハーの主張を裏付ける研究として、ハアース(Hass, 1998)の「ルネッサンスの男とその子どもたち：1300-1600年のフローレンスにおける子どもの誕生と乳幼児期」には、イタリアのフローレンスにおける子どもの養育状況が述べられている。彼は1300年から1600年間のフローレンスの会計帳簿、手紙、ルネッサンスに関する文献を調べ、子どもの誕生から幼児期までの父親の態度と行動を研究した。エリートของフローレンス人は子どもの誕生に喜びと充足感を持ち、ほとんどのフローレンス人は子どもを欲しいと願い、子どもには特別のニーズがあり、日常生活の中で喜んでそれを与えた。また、児童期についても、発達段階の特別の時期であることを多くの親は認識し、その児童期が、アリエス派の学者が言うような残酷なものではなかった。さらに、様々な儀式を社会は用意し、洗礼、命名、子どもの名付け親などを与えた。したがって、「歴史家が、どうして近代以前の家族は近代の家族よ

りも劣っていることを示すことに執着しようとするのかわからない」(p.183)と述べる。

#### 4. 児童への態度について、

多くの歴史学者が、子どもは必要とされず、ネグレクトを受けていたと主張してきた。一部の学者の間では、子どもは親と国家から二重の虐待を受けていたとの声もある。前述のように、過去において子どもは小さい大人と考えられており、大人とは違うものとして認識されるようになったのはごく最近のことである。この児童期の認識に伴って子どもへの関心が高まり、それが時には厳しい躰という形で現れたり、また、緊密な親子関係という形をとって現れたりした。こうして、多くの歴史学者は、過去には児童期がなかったという主張を受容し、その証明を試みてきた。これに対して、80年代90年代の研究では、虐待は一部であり、多くの子どもは親に愛され育ったと言われている。

ドゥモースは「子ども期の歴史は、いまようやく、その長い悪夢から覚めようとしている」(p.1)と述べ、過去の子どものいかに酷い目にあってきたかを検証した。さまざまな資料に基づいて、歴史上の子どもは、その養育者による子殺し、子捨て、脅かしによる統制、そして性的な虐待を受けてきたこと示し、「18世紀以前に生まれた子どもの大部分は、今日で言う“被虐待児”(battered children)の範ちゅうに入る」(p.122)という結論を下している。

ドゥモースは「親たちが慣例的に行っていた子捨ての実態はこれまでめったにとりあげられたことはない」(p.93)とし、「子捨てのいちばん古くて極端な形態は、子どもを公然と売りだすことであった…もうひとつの形態に、子どもを政治上の人質としてか、負債の担保として利用するというやり方」(p.93-94)があり、その歴史は「バビロニアの時代にさかのぼることができる」(p.94)と述べている。子捨てに関する最近の研究では、ボスウェル(Boswell, 1988)が「古代ギリシャ時代から中世後期まで間、ヨーロッパの広範囲にわたり、親がいかなる社会階層であっても、大勢の子どもが遺棄されていた」(p.428)という見解を示している。彼は、親が子捨てをする場合を、大きく分けて6つ挙げている。① 貧困や天災などの原因によって子どもの養育が困難になったとき、② 近親相姦によって生まれた子どもや私生児、障害児を恥じて、そのような子どもの養育に気が進まないとき、③ 子どもが増え

ることによって相続上の問題が起きるのを避けることを考えたとき、④ 財産や地位のある他の誰かが子どもを拾って、ずっと良い環境の中で育ててくれることを願ったとき、⑤ 子どもの性別が期待に外れていたとき、⑥ たとえば、宗教上の不吉な日に子どもが生まれたときなど、子どもが不吉の前兆を予感させるときである。さらにボスウェルに関して言えば、「誰の子どもかわからないようにして捨てられるが、同時に、人の注意を引くようにしてある」(p.429)という記述が特に注目すべきである。親は様々な理由で子どもを捨てたが、それでも子どもが誰かに拾われることを期待していたことが伺える。このことは同時に、捨てられた子どもを救済する人がいたということも表わしている。また「子どもは売られたり、他家に寄付されたり、または死んだ子どもの代わりとして迎えられたり、あるいは里子に出されたが、それでも当時は、捨て子の死亡率は普通の子どもの死亡率よりほんのわずか高かったにすぎない」(p.429)ことから、ほとんどの捨て子を救済する「他人の親切」が十分あったことが伺える。

ストーンは、イギリスで家庭生活のスタイルを何世代にもわたって追跡し、初期のスタイルは子どもに対して無関心か残忍かのどちらかであったと考えた。乳児の高死亡率が親子間の愛情に不利に作用したと考え、「そうした短命な生き物に対して…、非常に多くの父親たちは、今日の人々が家庭内で飼育している猫とか犬とかといったペットに与えるのとまったく同じ程度の愛情を持って、乳幼児期の自分の子どもたちを見ていた」(p.85)と述べて、「子どもたちは、しばしば無視され、残虐に扱われ、殺されてしまうことさえあった」(p.81)と結論付けている。

ショーターも、大人の子どものに対する態度が、厳しく残酷な態度から配慮と愛情のこもった態度へと変化していったという歴史的進展を辿っており、「伝統社会の幼児たちは、親の怒りが爆発したときだけでなく、日常的にしいたげられた状態であった」(p.178)と述べている。子どもに対する虐待や折檻といった肉体的な暴力は、大都市でも農村でもありふれた事柄であり、親が子どもの性別や年齢を忘れてしまうことや、子どもが死んでも平然としていること、そして、子捨てや乳母養育の実体を示しながら、伝統社会の親が子どもに無関心であったことを述べている。

また、虐待やネグレクトが子どもに及ぼす影響に関

しては次のように述べられている。ドゥモースは、脅かしによる子どもの統制が及ぼす心理的影響として、「夜中に、幽霊、悪魔、枕もとの魔女、ベッドの下に黒い大きな犬、部屋に這いずりまわるねじれた指」(p.156)などの悪夢や幻覚、「ひきつけの発作、聴力や発話能力の喪失、記憶喪失」(p.156)を挙げている。また、身体的影響に関して、「それ自体がたとえ、子どもの初期の身体発達にさほど影響を与えなかったとしても、きついスウォッドリング、ほったらかし、たえざる虐待がいっしょになって作用して、今で言う発達遅滞児にあたる子どもが昔はたくさんいたのではないか」(p.156)と述べている。そして、「今日の子どもの大部分が、11ヶ月から12ヶ月の間に歩行をはじめののに対して、昔は一般にそれが遅かった」(p.156)という事実を、膨大な数の資料から発見し、歴史上の子どもが発達遅滞であったことの証拠としている。

またショーターは「精神的な麻痺」について説明している。子どもが誕生後2年間は乳母養育をされていたこと、乳幼児を数ヶ月間スウォッドリングの布できつく縛って身体を拘禁しておくこと、そして大人が教育上子どもの意志を故意に打ち砕くこと、これらすべては、「精神的な麻痺」とでも呼ぶべき心性を生む原因になったと考えた。この心性により、「他者に対する最初の応答が、最善の場合でさえ、抜け目のない冷淡のものであり、また、最悪の場合には、猜疑心と敵愾心、専横と服従、疎外感と憤激などが交じり合っているような」(p.82)パーソナリティを形成した大人を多く生み出したとしている。

アリエスは、母親が幼児に無関心であるのは、伝統社会の特徴であると最初に主張した人であった。写真や家庭実用書などから、彼は、中世では幼児は人間とは違った生物であると考えられていたという結論に達したのである。中世の人びとにとっては、幼児というのは魂をもっているかどうか疑わしく、神の意志で生まれ、神の命で死に、その短い生涯は、大人の同情や憐れみを受けるに値しないものであった。「子供は…、取るに足らぬ存在で、生活に深く入り込んでいなかった」(p.40)、「あまりに目減りが大きく、あまりに脆弱な子供期に対するこの無関心な態度は、子供の品評会を催していたローマ人や中国人社会にみられる無感覚とそう隔たっていない」(p.40)と述べるが、「こうした見解は、あたかも子供期を無視しているかのよう理解されてきたが、むしろそこに子供期に対する真

摯な本物の意識の出現を見なければならない」(p.128)としている。すなわち、このことから子供が冷遇されていたと即断してはならないこと示唆する。彼は、過去に子供は大人とは違うことが認識されていれば、子供はより厳格な方法で育てられ、より厳しくしつけられていたのではないかと主張している。実際に、17世紀に幼児期の概念が現れると、これと同時に、親の監視も含め、さらに厳しい躾の仕方が現れた。

ポロックは、系統的に過去の研究者の説を検証することを試み、15世紀から20世紀初頭までのイギリスとアメリカの日記や自叙伝的な資料を広範囲にわたって調べ上げ、詳細に分類し分析した。彼女は、「資料から読み取れる情報により、数世紀にわたる研究を通して、親は子どもの行動を支配、もしくは少なくとも規制しようとしてきたことが明らかである。親は自分の目的を果たすために、さまざまな方法を取ってきた。体罰、権利の剥奪、助言、説教、子どもの恥辱、そして諫言などである」(p.199)と述べる一方で、「虐待行為は一般的に存在したというよりは、むしろ例外的に存在した」(p.199)という見解を示し、過去の親が子どもに関心を持たず、その特殊なニーズを認めず、厳しく扱ったという見解を支持する証拠はなかったと結論付けた。

オーム(Orme, 2001)は、歴史上の子どもにとって居心地の良い場所でなかったとするアリエス以降の多くの研究者たちの見解を覆そうとした。彼は死亡、虐待、子殺しに関する資料を必然的に取り上げざるをえなかったが、生活におけるこのような暗い側面は、大人や養育者が子どもを慈しみかわいがる姿や、子どもが幸せそうに遊びに夢中になっている姿、または家族に囲まれて安心して座っている姿を描いた肖像画に見られる明るい側面とのバランスが取れているとしている。彼は、中世時代の子どもの幼児期から青年期にかけての生活を多彩かつ鮮明に映し出している絵を提示し、子どもとその取り巻く文化・慣習との関係を究明した。歴史や物語、絵画、そして中世の文化から、洗礼、誕生日、身体障害、遊びの時間、家庭生活、そして、大人の世界への参加に関する子どもの生活を明らかにした。

ポロックが述べるように、さまざまな資料や文献から虐待やネグレクトの事実は存在したと考えられるが、それは必ずしも一般的であったのではなく部分的なものであったのではないかと考えられる。歴史家は、自

説を支持する証拠を歴史の中に探し出そうと試みる。しかし、記録として残されているのは上流階級に関するものが主流であり、そこから推測したことを一般化して理論化しても、その理論が記録に残されていない貧困階層にも当てはまるとはいえない。さらには、自説を支持するための証拠が非常に選別的であったり、その証拠に不当かつ非論理的な解釈を加えていたり、大胆かつ一貫性に欠ける見解を示している場合が少なくない。また、児童観の研究は大人の側から見た児童期の概念や親子関係を扱っており、そこには子ども自身の声が全く反映されていない。

確かに、取り扱う歴史上の資料や文献は、子どもの観点からではなく大人の観点に基づいて記述されたものかほとんどで、子どもが記述したものを見つけることは難しい。同時に、大人の観点といっても、その大人はほとんどの場合、女性ではなく男性、貧乏人ではなく金持ち、あるいは教育を受けていない人ではなく平均して裕福な家庭の出身の教養人である場合が多い。また、資料や文献の内容も、少女よりも少年、貧困層よりも上流階級に関する記述が多い。

記述された歴史から利用可能な証拠資料を探す場合、上記のような偏りがあることにも留意しなければならないといえる。

## 5. まとめ

西洋中世における児童期に関して、わが国にはアリエス、ショーター、ドゥモースの翻訳書があり、中世には児童期の認識がなく、児童は小さな大人と考えられていたという説が紹介されている。アリエスは、中世には児童期の概念がなく、人間は母親の世話なくして生きていけるようになると成人社会の仲間入りした。大人の服装を着、大人のように働き、おとなと一緒に戦に行った。アリエスの主張には、傾向としてあげている細部、時期が不明確であり、社会階層の差が不明確であり、児童から成人へ、乳児から児童への区別が無い。17世紀になってから貴族や有識者の子どもの服装、おもちゃ、ゲーム、書物が生まれ、教育への新しい態度が生まれ、成人期から児童期が分離されてきた。一方、乳児に対しては軽く見るようになり、おもちゃやペットのように扱われ、大人を喜ばせる対象にされた。子どもの安全を保障する責任が生まれ、子どもは善悪を併せ持つ生き物であり、悪を閉じ込め善を育てるためにしつけを必要としたと主張する。

しかし、児童期がなかったとする説の根拠に用いた資料が、少数の知識人による日記、宗教的想像的文献や建造物にみられる彫刻、おもちゃ、絵画から結論を出しており（アリエス、ストーン）、そのために多くの研究者が中世の児童期に関する研究を行った結果、欧米では中世にも児童期の概念があったという考え方が多い。さらに、7歳までの時期は依存の時期と常に考えられてきたようである。その時期は、母親、養母あるいは乳母が子どもの人生で最も重要人物である時である。次の段階は、7歳から12乃至14歳までであり、大部分は教育と訓練の時期として組み立てられ、家であるいは、別の世帯の年季奉公で、あるいは学校で行われたように見える。しかしながら、14世紀から19世紀の期間にはヨーロッパでは、この期間も依存と責任の無い期間と解釈され始め、19世紀後半にはこのグループに入る殆どの子どもが雇用からフルタイムの学校教育へ移された最高潮期になる。

しかし、中世は1000年以上にわたる期間があり、科学的統計手法により年代ごとに調査統計をしたものはないので、論者によって、その扱っている期間が異なり、地域も異なり、調査の出典もきわめて少数の者にしか適用できないものであったりするため、中世全般を一般化した児童観を論じるのは困難である。児童期あるいは児童観を論じる場合には、その背景にある社会経済情勢、社会構造、文化などその基盤となる条件を記述する必要があるが、児童期に関する多くの研究者の研究結果をまとめてみると、現在は中世には児童期の概念が存在しなかったと考える学者は殆どいない（Nicholas, 1991、Thomas, 2000）けれども、多くの親は彼らの子どもを大切に思い、愛情をもって扱い、将来について心配した。同時に、無知、病気あるいは確信の結果であったとしても、残酷または無関心に振舞った人もいた。証拠が非常に継ぎはぎであるので、過去に関して一般的なパターンを示す証拠としてどちらかの例を利用することは、現在に関して同様の一般化をするのと同じく間違いであるかもしれない。



## 引用文献

アリエス著、杉山光信・杉山美恵子訳（1980）「＜子供＞の誕生；アンシャン・レジーム期の子供と家族生活」東京；みすず書房  
 ショーター著、岩橋誠一・作道潤・田中俊宏・見崎恵子訳（1987）「近代家族の形成」東京；昭和堂  
 ストーン著、北本正章訳（1991）「家族・性・結婚の社会史；1500～1800年のイギリス」東京；頸草書房  
 ドゥモース著、宮沢康人訳（1990）「親子関係の進化；子ども期の心理発生の歴史学」東京；海鳴社

Aries, P. (1962) *Centuries of childhood: A social history of family life*. Translated by R. Baldick. New York: Vintage Books. French: *L'enfant et la vie familiale sous l'ancien régime*. Paris: Plon, 1960  
 Boswell, J. (1988). *The kindness of stranger: The abandonment children in western Europe from late antiquity to the Renaissance*. Chicago: The University of Chicago Press.  
 Cunningham, H. (1995). *Children and childhood in western society since 1500*. Edinburgh Gate: Addison Wesley Longman Limited.  
 Demos, J. (1970) *A little commonwealth: Family life in a Plymouth Colony*. London: Oxford University Press.  
 Fuller, P. (1979). *Uncovering childhood*, in M. Hoyles ed. *Changing childhood*. London: Writers and Readers publishing Cooperative. pp.71-108.  
 Hass, L. (1998). *The Renaissance man and his children: Childbirth and early childhood in Florence, 1300-1600*. New York: St. Martin's Press.  
 Hoyles, M. (1979). *Childhood in historical perspective*, in M. Hoyles ed. *Changing Childhood*. London: Writers and Readers Publishing Cooperative. pp.16-29  
 Hunt, D. (1970). *Parents and children in history: The psychology of family life in early modern France*. New York: Basic Books.  
 Illich, I. (1973). *Deschooling society*. New York: Harper & Row, Publishers, Inc.  
 Laslett, P. (1971). *The world we have lost*. London: Souvenir Press.  
 Le Roy Ladurie, E (1978). *Montaillou: The promised land of error*. New York: George Braziller, Inc.  
 Lyman, R. (1976). *Barbarism and religion: Late Roman and early medieval childhood*, in L. deMause ed. *The history of childhood*. London: Souvenir Press. pp.75-100.  
 McLaughlin, M. (1976). *Survivors and surrogates: Children and parents from the ninth the thirteenth centuries*, in deMause ed. *The history of childhood*. London: Souvenir Press. pp.101-182.  
 deMause, L. (1976). *The evolution of childhood*, in deMause ed. *The history of childhood: The evolution of parent-child relationships as a factor in history*. London: Souvenir Press. pp.1-74.

Nicholas, D. (1985). *The Domestic life of a medieval city: Women, children, and the family in fourteenth-century Ghent*. Lincoln: University of Nebraska Press.  
 Nicholas, D. (1991). *Childhood in medieval Europe*, in J. Hawes & N. Ray eds. *Children in historical and comparative perspective: International handbook and research guide*. New York: Greenwood Press. pp.31-52.  
 Orme, N. (2001). *Medieval children*. New Heaven and London: Yale University Press.  
 Pollock, L. (1983). *Forgotten children: Parent-child relations from 1500 to 1900*. Cambridge: Cambridge University Press.  
 Schultz, J. A. (1995). *The knowledge of childhood in the German middle ages, 1100-1350*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.  
 Shahar, S. (1990). *Childhood in the middle ages*. London: Routledge.  
 Shorter, E. (1975). *The making of the modern family*. New York: Basic Books, Inc.  
 Stearns P. and Stearns, C. (1985). Emotionology: Clarifying the history of emotions and emotional standards. *American Historical Review*. vol.90. pp.813-836.  
 Stone, L. (1979). *The family, sex, and marriage in England, 1500-1800*. New York: Harper Torchbooks.  
 Thomas, N. (2000). *Children, family and the state: Decision-making and child participation*. London: Macmillan Press Ltd.  
 Tucker, M. J. (1976). The child as Beginning and end: Fifteenth and Sixteenth century English Childhood, in L. deMause ed. *The history of childhood*. London: Souvenir Press.  
 Wilson, A. (1980). The infancy of the history of childhood: An appraisal of Philippe Aries. *History and Theory*. vol.19, pp.132-154.